

# ピアノ実技指導のための教材研究

バイエルとブルクミュラーの検証と考察

久保 節子

Study of Teaching Materials of Practical Skills for Piano Instructor  
The Examination and the Study of Beyer and Burgmüller.

Setsuko KUBO

Key Word: piano, Drills for Beginners, Training for Nursery School Teachers

## 1. はじめに

本学では毎年 200 名近くの学生が入学してくる。新入生の器楽の授業では、全員がはじめに「バイエル教則本」を使用して基礎的なピアノ演奏技術と知識を身につける。次に「ブルクミュラー 25 の練習曲」で主に表現力習得に努める。

この「バイエル」については、日本では古くからピアノ初心者の教本として使用されてきたにもかかわらず、何故か研究の対象とされず、ただただ多くのピアノ学習者によって使われ続けてきた。指導者側は作曲者の生涯も知らず、教則本以外の作品も知らず、ピアノ入門者と見れば自動的に与えてきたといえる。ブルクミュラーはバイエルほどではないにしる関心は低く、そのまま長い時が過ぎた。

しかし近年ようやく安田寛氏ほか数名の熱心な研究者のお蔭でバイエルについての、また飯田有沙・前島美保両氏によってブルクミュラーの詳細が明らかにされ、いずれも新たな視点から見直されようとしている。

そこで、ここではその研究成果を踏まえて

本学の器楽授業におけるバイエル教則本とブルクミュラー 25 の練習曲を改めて考えてみたいと思う。

## 2. バイエルとバイエル教則本

通常「バイエル」というと、バイエル教則本のことを指すが、この教則本を作った作曲者がフェルディナンド・アウグスト・バイエルという人物なのである。

日本にこの教則本がもたらされたのは明治 13 年(1880 年)、明治政府のお雇い外国人であったアメリカ人のルーサー・ホワイティング・メーソンによる。日本に西洋音楽を取り入れ、音楽の教育者を養成する機関として音楽取調掛(後の東京音楽学校、その後の東京藝術大学)が出来、そこで使用する教科書として 20 冊が購入された。現在、東京芸術大学附属図書館にそのうちの 10 冊ほどが残されているということであるが、同図書館における受け入れ番号 1 という名誉ある図書である。また、この時の音楽取調掛の担当者は伊沢修二(いさわしゅうじ)であった。伊沢修二は日本におけ

る西洋音楽の歴史を考える上で欠くべからざる人物であり、音楽のみならず、芸術・文化の多岐にわたって文部官僚の枠を超えた、あの時代ならではの傑出した人物と認識される。

さてバイエルであるが、1806年（安田氏の研究により従来の1803年が訂正された）ドイツ中央部のクヴェアフルトに生まれ、バッハがオルガニストとして活躍した、かの有名な聖トーマス教会の附属学校で学び、後にライプツィヒ大学に進んだ。母方の祖父、曾祖父が教会のオルガニストであり附属学校の教師であったことから、音楽の手ほどきは母親から受けたと推察される。16歳で父親が亡くなるとドイツ各地やスイスなどでピアノ演奏家として、またピアノ教師として活動していたが、28歳でドイツ西部マインツに落ち着き、生涯をここで過ごした。バイエルに対する評価は当時も現在も、二流あるいは三流の作曲家・編曲家というものである。

バイエルが生きていた19世紀の半ば頃というと、もちろんレコード、ラジオ、テレビなど一切ない時代である。人々は流行のオペラやバレエの音楽を好きな時に聴いたり、そうした曲を技術的に易しく編曲して気軽に楽しめるピアノ曲を求めた。バイエルは、そんな世の中の需要に応える編曲家として活躍したのである。マインツの音楽出版社シュミット社の出版目録では、ワーグナーやロッシニを抜いて部数第一位であることからみても、当時いかにバイエルの編曲作品が必要とされたかが分かる。バイエルは作曲家というより、

職業として多くの編曲の仕事をこなす、いわば音楽の職人だったと言えるのではなからうか。

一方ピアノはこの時代、楽器としての機能が向上・発達を遂げて普及し、ピアノ愛好家が増大していた。多くのピアノ教師が愛好家にピアノを教授し、入門書も数多く作られた。バイエル教則本は1850年に出版され、ドイツ国内はもとよりフランス、スペイン、アメリカなど多くの国で出版され、使用された。

日本には前述したように明治13年(1880年)にアメリカ経由で入ってきたが、その後さまざまな編集がなされ、さまざまな出版社から出版され今日に至っている。ピアノ入門書として我が国で136年間使われ続けてきたというのは驚嘆すべきことである。

しかしだからといってそれほど優れた教本であるかという点、多くのピアノ指導者が多年にわたり疑問を感じていたことも確かであった。それは主に 1) はじめに高音部記号の曲が続き、低音部記号の曲の始まるのが遅い。そのため低音部記号を受け入れにくい。 2) 音が古典的な音に限られていて、音域も狭い。時代おくれの音楽に感じる。 3) おなじような練習曲が続きつまらない。 4) ヨーロッパの国々では使われておらず、使っているのは日本だけである。といった理由による。

昭和40年頃に起こった、このバイエル批判が契機となり、一気にバイエル離れが進んだ。現在ではグローバー教本、トンブソン教本、バーナム教本、ヤマハ「ピアノ・オルガンの

本」、バステイン教本等々、楽譜売場には数え切れないほど多くの種類の入門書が並んでおり、実際にも現在、バイエルを幼い子供の入門書として使用するピアノ教師はほとんどいないと思われる。

しかし、このバイエル批判は真に正しいのか、改めて検証してみる必要があると考える。壮年のバイエルの肖像写真を見ると、厳格で真面目に生きてきた一ドイツ人という印象を受ける。一般愛好家が楽しむための曲を数多く編曲する多忙な生活の中で、幼い子供のためにピアノ教則本を作ったのは単に仕事として引き受けたのではなく、彼の誠心誠意の気持ちの表れではないかと思えてくる。凡庸な曲が多いのは確かであるが、しかし一曲一曲真面目に取り組んでいることは認められるのである。知られていないが、バイエル教則本の正式のタイトルは「フェルディナンド・バイエル作品 101 母たちに捧げる最も幼い生徒のためのピアノ入門書」となっており、序文には「音楽に親しんでいる両親が、子供がまだ幼いとき、本格的な先生につける前にまず自分で教える時の手引きとしても役立ててほしい」と書かれている。バイエルがこの教則本を、両親の愛情をまず第一義に考えていたことが分かる。また、訓練だけの無味乾燥な教本とならないよう、「大好きなメロディーによる楽しい 100 曲」を併せて 1 セットとしていた。日本に伝わった教則本は前半の練習曲 106 曲のみだったことも、よりバイエルを「つまらない教本」と印象づけてしまったようである。

### 3. ブルクミュラーとブルクミュラー 25 の練習曲

こちらでも通常「ブルクミュラー」と言っているが、曲名としては「ブルクミュラー 25 の練習曲」である。そしてブルクミュラーもバイエル同様人名であり、作曲者の名前である。また従来「ブルグミュラー」と言い習わされてきたが、ドイツ語の発音は濁らない「ブルクミュラー」であり、全音楽譜出版社も 1977 年改訂版を機に「ブルグミュラー」から「ブルクミュラー」に表記を改めている。

フリードリヒ・ヨハン・フランツ・ブルクミュラーは 1806 年、南ドイツのレーゲンスブルクに生まれ、その後デュッセルドルフに移り住んだ。父親はワイマールの劇場やデュッセルドルフ市の音楽監督をつとめ、母親は貴族出身の歌手、かつピアノ教師であった。このような恵まれた音楽環境で育ったが、真に才能があったのは弟のノルベルトだったようで、このノルベルトが 26 歳で早逝した折にはメンデルスゾーンやシューマンからもその死を惜しまれている。このためか、兄フランツと弟ノルベルトは度々混同され、出版物の解説でも最近までしばしば混乱がみられたということである。父親の死後、フランツはピアニスト、チェリスト、ピアノ教師などさまざまな音楽活動をしながらドイツ各地を転々とした後、26 歳の時パリに出る。

当時のフランスはフランス革命の後の一時的な王政復古の時代で、ルイ・フィリップ 1 世が「民衆の王」として在位しており、パリはロマン主義芸術の中心地であった。貴族や

上流階級の人々の社交の場、サロンがあちこちで毎夜開かれ、画家ドラクロワ、コロー、小説家はバルザック、ユーゴー、デュマ、メリメ、ハイネ、音楽家はロッシーニ、ケルビーニなどそうそうたる面々が集い、談笑し、音楽を楽しんでいた。1810年生まれのショパン、1811年生まれのリストも、このサロンの輝けるスターであったことはよく知られている。

ブルクミュラーはこのような場にふさわしい、ロマンティックな美しいメロディー、明るく上品で軽快なピアノ小品—いわゆる愛すべき「サロン音楽」を数多く作曲した。彼の400曲近い作品の多くはこのサロンの向きのワルツ、ポルカ、ロンドなど舞曲のピアノ小品で、そのほかバレエ音楽にも深く関わっていたところから推察するに、彼自身が踊りの音楽やバレエを好んでいたと思われる。彼自身は社交家ではなかったのか、サロンでの活躍は不明であるが、リストや当時有名だったピアニストのタールベルクなどと親交があったようである。

また、ブルクミュラーは国王ルイ・フィリップ1世の子女のピアノ教師をつとめており、社会的にも認められた音楽家であった。当時一流の人気あるピアノ教師の教授料がいかほどであったか。ショパンが友人宛の手紙に「レストランでの豪華な夕食が32スー」と書いているが、そのショパンのレッスン料が1時間20フランであった。これを現代の貨幣価値に置き換えてみると食事代の32スーは約3200円、レッスン料の20フランは約10万円ということになり、ブルクミュラーの収入も相当なものであったと推察できる。しかも弟ノル

ベルトの死後、手稿楽譜を探し出して出版し、墓碑を建てるなど人柄も円満で誠実な人物であったようである。

ブルクミュラー25の練習曲は1851年作曲とされているが、これ以外にも少し高度な18の練習曲、12の練習曲など同じ頃に作曲された作品があり、今日も25の練習曲ほどでないにしてもかなり知られ演奏されている。

25の練習曲が日本に入ってきたのは昭和30年(1955年)頃といわれ、バイエルに遅れること75年である。昭和30年代後半から40年代にかけての高度経済成長により豊かになった日本はピアノのおけいこブームが起り、出版業界・楽器業界は隆盛をきわめた。それと共にブルクミュラーもバイエルやツェルニーと並んでしっかりと根を下ろしたのである。25の練習曲はそれぞれに愛らしいタイトルがつけられ、演奏者がそれによって想像力をふくらませ、軽快で明るく、清潔感あふれる美しいメロディーや和音の響きを楽しんで演奏できるよう工夫されている。技術的にも難易度は高くなく、それでいて演奏効果のある曲ばかりであるところが人気のある所以であろう。18や12の練習曲も同じく芸術作品とまでは言えないにしても、ピアノ学習者にとってはロマンティックで楽しい、価値ある曲の数々である。

このようにバイエル、ブルクミュラーの生涯をたどってみると、非常に多くの共通点があることに気づく。同じ1806年生まれのドイツ人であること、教本以外には知られた作品

がないこと。共に日本において長年使用されていること。それにもかかわらず経歴や生涯がこれまでほとんど研究されたことがなかったこと。作曲された曲のほとんどが、編曲ものや技法の難しくない曲であり、作曲家としては一流でないこと。教本は46歳、47歳ころに作曲されたこと。収入が多く、生活が安定していたこと、等である。

#### 4. 教員、保育者養成課程の教材としての意義

短大入学時までピアノ演奏の経験が全くない学生が、2年間の学習のみで保育等の現場で通用するほどの技術を身につけるということが非常に難しいことは自明である。ことに入学してからの半年間にバイエル教則本を終了するというのは、毎年のことながら教える側にとっても至難のことである。本学においても学生、教員の双方にとってより効率的でより良い授業方法を模索し続けているが、まず一番大きな問題は、必要な技術の習得にかけることのできる日数が限られていることである。同じピアノ初心者といっても、幼児と短大生とではこの「時間の制約」が大いに異なる。幼児ならば時間をかけて少しずつ理解させ、反復練習をさせながら指と頭脳の連携をはかることができる。入門書にしても、現在出版されている入門書のほとんどは幼児向けに作られたもので「ゆっくりと、無理なく、少しずつ」である。バイエル教則本が数々の批判があるにもかかわらず、現在も多くの保育養成機関で使われ続けているのは、時間の制約の中で目的を達するのに適した教本であると認められているからと言えよう。

例えばバイエル批判の中で、「使用されている音が限られていて、音域も狭い」というのはそのまま逆に、基礎を確実に習得するにはその方が良いと言える。「つまらない」「古くさい」と感じられる右手がメロディー、左手が主要3和音による伴奏という形の曲が多いというのは、非常にオーソドックスな形であり、幼児の歌唱伴奏はこれが基本である。また、左手がメロディーの曲や多声音楽の曲は保育現場ではほとんど必要としない。作曲家バイエルが日頃耳にし、作曲していた音楽は時代からいってロマン派の音楽だったろうと思われる。ところが教則本にはロマン派の音楽のかけらも見出すことはできない。ここからはバイエルが教則本を作った時、「音楽の基礎」を念頭に置いていたことは明らかであり、ロマン派の音使いをあえて取り入れなかったと考えられる。自身がプロテスタントの教会音楽の中で育ち、そして古典派の音楽—ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンの音楽の偉大さをよく理解し、また古典派の音楽こそが音楽の基礎であることをよく認識していたためではなからうか。

バイエル終了後、ブルクミュラーの曲に進むのは、ピアノによって感情や情景を表現するに適しているからであり、学生はここで初めてロマン派音楽を体験する。より自由な音楽世界を知ることは、将来の保育現場で音楽の楽しみや喜びを子供達と共有するに必ずや役立つと思われる。教本としてブルクミュラー25の練習曲を考える時、音楽性と技術的な難易度を勘案して、やはりほかに適した曲集が

見当たらないようである。25曲それぞれに曲想や技法に特徴があり、これだけまとまった曲数の教本をほかに見出すのは難しい。

バイエル教則本、ブルクミュラー 25 の練習曲、ともに教本として特に優れているとは言えないにしても、ことにバイエルは作曲家としては凡庸だったというのは頷けるのであるが、保育養成機関の様々な条件下、現状ではこの2つの教本が最善最適と言わざるを得ない。いずれの教本も、我が国で長年使われ続けていたために学生が多少なりともどこかで「聴いたことがある」曲がある、ということも大いにプラスに作用している。「知っている曲」は練習の成果が自分で分かるため弾けるようになった喜びが得られるが、全然知らない曲は練習していてもそれが正しいか、間違っているか確信が持てないために、初めから取りかかる意欲が見られないからである。

本学では1年次の課題であるバイエルとブルクミュラーを毎年ほとんど全ての学生が習得し、単位を取得している。このピアノ演奏技術の習得があってはじめて自らピアノ伴奏をしながら歌うという「弾き歌い」が可能になる。ピアノ演奏の経験のあるなしに関わらず、全ての学生のそのたゆまざる努力は、我々器楽指導者の常に認めているところである。

音楽は時代と共に変化してきた。モーツァルトの「不協和音」は現代の人間には何がどの部分が「不協」なのか分からない。ドビュッシーやプロコフィエフの音楽が世の人々に衝撃を与えたことも昔語りになり、現在さまざま

まな音楽が溢れ、人々はより刺激的なリズムや音に反応する。電子音も違和感がなくなり、今や楽音と騒音との区別も曖昧になってきている。常に何らかの音がしている現代の生活の中で豊かな心を育てる音楽教育、保育における音楽を考える時、教材以前の大きな問題が立ちはだかるのを感じる。

#### 参考文献

- 安田 寛著 「バイエルの謎」 新潮社  
 安田 寛監修 小野亮祐・多田純一・長尾智絵著 「バイエル原典探訪」 音楽之友社  
 飯田有抄・前島美保著 「ブルクミュラー 25 の不思議」 音楽之友社  
 河上徹太郎著 「ショパン」 音楽之友社